

3. 整備メニューの抽出

3-1 基本的な考え方

地域の活性化するためには、「川のふるさと」で現在行われている「活動」や新たな「活動」を支援する環境をつくるのが重要である。そのためには、場の整備等のハード事業に加え、人々の意識を喚起するソフト事業が必要とな

る。そこで、流域の資源を活用した「活動」を具体的にあげ、次の3つの視点を設定し、それらを支援する環境づくりのメニューを検討した。(図-2参照)

3-2 整備メニューと体系

流域の資源を活用した「活動」の具体例とその効用、地元の役割を整理した。(表-1参照)

これらの「活動」を支援する環境づくりを3つの視点に照らしてみると、流域全体をつなぐ基幹となる整備と地元での展開を育む拠点となる補完的な整備が必要となる。(図-2参照)

基幹的整備として、太田川を大動脈とする「水と緑のネットワーク」、情報の受発信、交流、サービスの拠点となる「リバーステーション」、流域を考え、調査研究、提言、住民意識啓発、交流等を行う「太田川流域振興交流会議」を位置づける。補完的整備は、小中学校、病院、地元企業、地元生活者等と連携を図り、個々の場の特性を活かした整備を行うものとする。

《3つの視点》
【育成面】
「川のふるさと」のあり方を考え、地元、利用者、行政、企業、諸団体の意見交換や調整を実践する組織づくりと人材の育成。
【情報面】
「川のふるさと」の情報を充実し分かりやすく発信するとともに、新しい情報の収集や情報交換を活性化するシステムの構築。
【行動面】
流域の豊かな資源の保全、育成と、「川のふるさと」を体験、発見できる場づくり。

テーマ	項目	内容	効果	地元の役割(地元への益)
自然：自然との対話	天体に親しむ	空気がきれいな上流地域で星を見る	親子、家族で天体に親しむ	・星の見えやすい環境づくり ・地元商店利用増による経済効果
	生息生物に親しむ(エコツアー)	自然観察会、バードウォッチング、森林散策(水辺の生物、植物を探索する)カジカガエルの探聴会ホテルの鑑賞会、花の鑑賞・名所づくりサツキマスの週上を調整する	生息生物について学習する 貴重種の生態について学習する	・生息環境の保全 ・ガイド、指導 ・豊かな自然に対する意識向上 ・案内人等雇用機会の創出 ・地元商店利用増による経済効果
	地形・地質を楽しむ	流域の地形・地質を観察する・知る	地学について学習する 河川と地形との関係について学習する	・地形地質の保全、案内 ・案内人等雇用機会の創出
	アウトドアライフを楽しむ	川沿いでキャンプ、オートキャンプをする川沿いでサイクリングをするカヌー、筏で川遊びをする	遊びを通して川の魅力を体感する健康増進につながる	・現地調達食材のPR、販売
	流域の温泉を楽しむ	温泉巡り、転地療養	リフレッシュ効果と健康増進 歴史を学ぶこともできる	・地元商店利用増による経済効果 ・多様な滞在の楽しさを紹介する
	川そのものに親しむ	川で泳ぐ、水遊び、釣り、水辺で何もせず過ごす	遊びを通して川の魅力を体感する 自然と向かい合える、リフレッシュ効果	・繰り返し利用による経済効果 ・とっておきの遊び方の継承 ・繰り返し利用による経済効果
文化：文化への探訪	流域の歴史に親しむ	流域の神社・仏閣の探訪舟運に係わる歴史的遺構(渡し等)の探訪	流域の歴史を学ぶ 舟運の歴史を学ぶ	・歴史的遺構等の保存、活用 ・歴史を介しての交流、相互確認
	流域の文化に親しむ	地域のイベント、祭(神楽、火祭、物産展等)に出かける郷土料理を味わう	流域の文化・風土を学ぶ 地域の人と交流する	・文化伝承、人材育成、地域特産品の販売 ・祭や料理を介しての交流、相互確認
	伝統文化を楽しむ	伝統漁法や神楽を楽しむ	流域の伝統文化を学ぶ 地域の人と交流する	・伝統文化伝承、人材育成 ・伝統文化介しての交流、相互確認
交流：ふれあいの場づくり	生活を体験する	農林業、炭焼き、伝統漁法を体験するホームステイ	地域の生活を体験する 地域の人と交流する	・体験希望者の受け入れ、指導 ・都市との交流、相互確認
	太田川沿いのJ Rの利活用	イベント列車(学習、お座敷列車)へ乗車無人駅を拠点とした「テクテワーク」、スタンプラリー自転車乗り込み可能な列車利用のサイクリング、カヌー河口から上流へ川沿いに歩く	流域の自然、文化を学ぶ 地域の人と交流する 子供たちだけの活動範囲が広がる	・現地調達食材のPR、販売 ・J R可部線のアイデンティティの確立 ・J R利用増による経済効果
	リバーウォーク	川沿いに流域の歴史・文化を体験する川沿いに地域の人と交流する	川沿いに流域の歴史・文化を体験する 川沿いに地域の人と交流する	・来訪者を迎える気持ちと楽しむ心 ・沿川商店利用増による経済効果
	モリウォーク	源流の里地域相互を川から川へ、森を巡り歩く	流域の森の歴史・文化を体験する 流域の森の地域の人と交流する	・森の活動の多様な楽しさを紹介する ・経由集落利用増による経済効果
	手づくり体験	地元の人やお年寄りを先生にし、遊具、工作、食べ物などの手づくり体験をする。	上下流双方のコミュニケーション 世代を超えたコミュニケーション	・体験指導者の発掘、指導 ・都市との交流、相互確認、人材活用
	川辺のたまり場で憩う	談話等をして憩う	川への自然な親しみへの醸成 世代を超えたコミュニケーション、リフレッシュ	・場の清掃等 ・さりげない憩いの場での交流
情報：流域情報の発信	各種情報誌の発行	各種情報マップによる流域のPR(好きです太田川、瀬と淵マップ・発見マップ、可部線マップ等)治水・利水について学ぶ	上下流双方のコミュニケーション 学習機会	・地域の面白さを積極的に発掘、PR ・地域の関心、訪問の思いが湧く ・都市との交流、相互確認
	太田川ホームページの開設	ホームページの開設による一般への情報受発信モノバンク	上下流双方のコミュニケーション 学習機会	・地域の面白さを積極的に発掘、PR ・都市との交流、相互確認
	人材バンクの開設	川やその地域に詳しいお年寄りや専門家を登録インストラクターの養成	人材の発掘 川づくりへの企画への利用	・地域の人材を積極的に発掘、育成 ・都市との交流、相互確認、人材活用

表1 活動の具体例

4. 構想の実現に向けて

4-1 実現に向けての考え方

本構想は、太田川を絆とした地域振興に向けての基本的な考え方と施策の方向性を提示したものである。構想の実現には、行政組織、各種団体、民間企業、任意団体、地元生活者、来訪利用者等の各部門が、共通の努力目標として「川のふるさと整備構想」に取り組み、有機的に連携していくことと流域住民の積極的な参加が必要である。

さらに、様々な取り組みが進められていくなかで、構想をフォローアップしていくことが重要である。

4-2 実現に向けての取り組み

(1) 部門ごとの取り組み

各部門の取り組みとして考えられる具体例を以下に示す。

行政組織

- ・建設系部署：施策の事業化
- ・企画系部署：イベント企画、特産品開発

各種団体、第3セクター

- ・特産品開発、産業体験学習の促進、材料供給、観光への展開

民間企業

- ・JR：無人駅舎の活用、サイクル列車等の運行
- ・その他：一里塚としてのサービス提供、イベントへの協力

NGO

- ・イベント企画、流域振興交流会議に参加、情報提供

地元生活者

- ・人材バンク・モノバンクへの登録、情報提供、イベントへ参加・協力

来訪利用者

- ・イベントへ参加、材料地元調達

(2) 流域振興交流会議の設立

各部門の意見や企画を調整し取りまとめ、構想の基本理念を広く流域の人々に啓発していく組織として「流域振興交流会議」を設立し、充実させていく。

(3) 行動の実践

行動の実践は、流域の人々への啓発につながるものであり、既存の活動や計画への支援等、できることから始めることが有効と考える。

既存の活動、河川愛護団体等への積極的支援
廃校・余裕教室の活用

4-3 構想のフォローアップ

本構想は、「太田川流域振興交流会議」が主体となって各部門の行動計画や意見の調整及び情報の受発信を行い、「太田川サミット」や「川のふるさと整備構想策定委員会」と連携しフォローアップしていく。(図-3参照)

5. おわりに

本構想は、現在素案の段階であり、委員会で承認された後、構想(案)として公表し、広く地元住民や市民の意見を募り「川のふるさと整備構想」としてとりまとめる予定である。

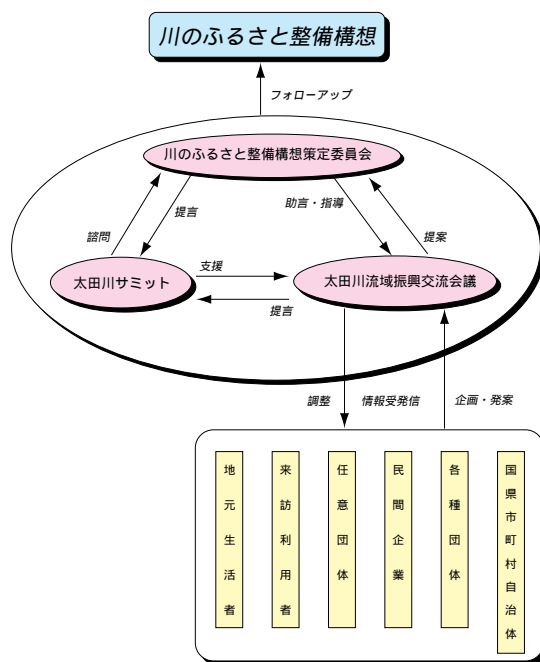


図-3 川のふるさと整備構想フォローアップの体系

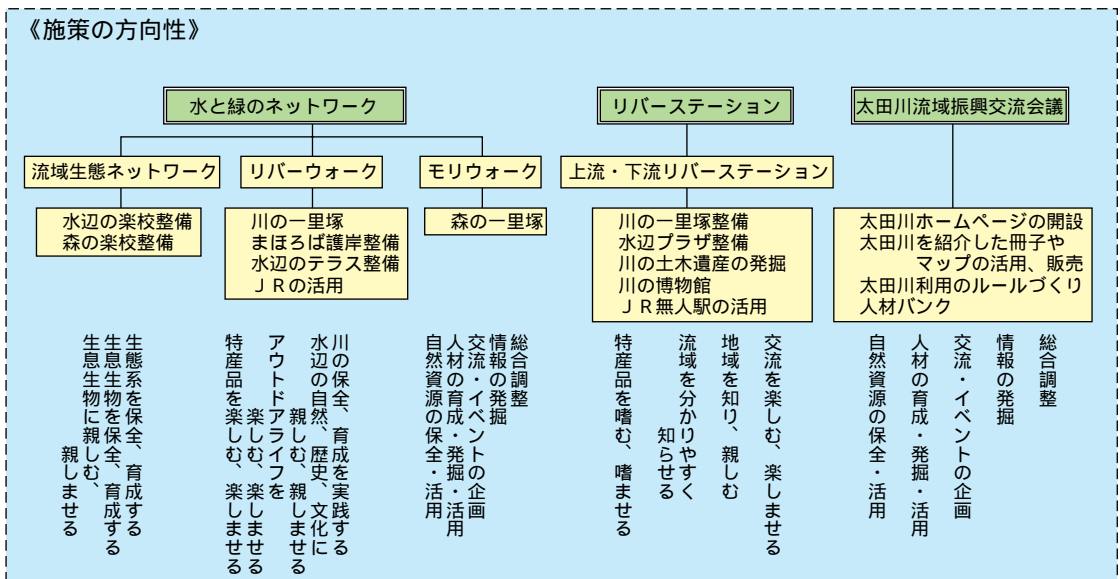
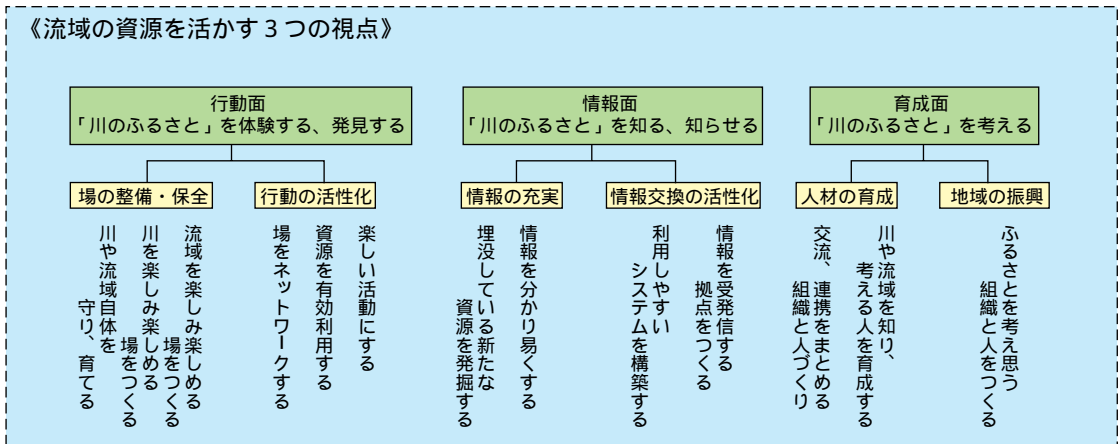
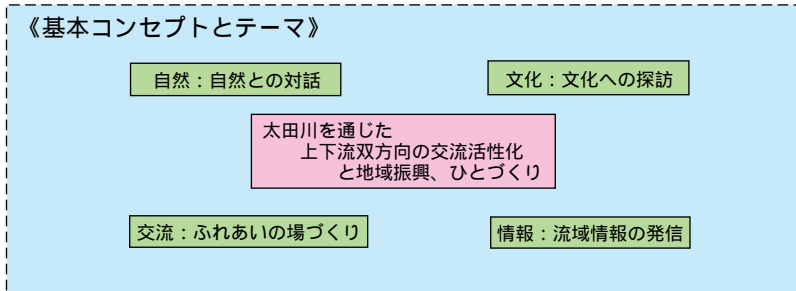


図2 整備メニューの体系